

「過剰な期待から確かな希望へ －発見から治療までの幹細胞の物語」活用ガイド



1. はじめに

本ツールは、再生医療というテーマを、科学的側面のみならず、社会的側面（倫理、政策、科学コミュニケーションなど）からも扱っています。活用にあたっては、着眼点の置き方によって、様々な形でご利用いただけると考えています。

本稿では、学校や患者団体の活動などにおける活用案をご紹介します。しかし、記載内容に縛られず、自由にご利用いただけますと嬉しく存じます。

また、別紙にて「フィードバックシート」も作成いたしました。どのように活用したか・参加者からどんな反応があったかなど、研究チームまで所感をお知らせいただけますと大変ありがたく存じます。

2. 活用ガイド

● 基礎科学から応用の流れに着目する：科学の授業や、科学を知るツールとして

基礎研究から臨床応用まで、どのような流れを辿って患者の手に渡るのか、研究の長い道程を学ぶツールとして活用できます。研究について学んでみたい方や、「将来科学者／医療者になりたいな」と思う学生の方にとって、具体的な過程を学べるツールとなっています。科学部がある学校であれば、部活動の活動の1つとしてもお使いいただけます。

<例>

・「研究から、どんな流れで『治療』『医薬品』『医療機器』として患者さんの手に渡るか、知っていますか？」という疑問提示ののち、本ツールを使って、流れを知る

● 科学と社会、どちらにも目を向ける：科目横断的（総合的）な学習として

再生医療に関わる専門分野は、科学だけではありません。そこで、例えば、高校や大学では、科目横断的（総合的）な学習の教材として活用いただけます。患者支援団体などでも、社会における科学のありかたを、皆で考える材料としてお使いいただけます。

科学は、実は、多様な関係者が関わる複雑なテーマです。本ツールの登場人物だけでも、科学者、医師、患者、患者家族、介助者、患者支援団体、人文社会系の研究者、助成提供機関、規制当局、政策決定者、メディア、バイオテクノロジー関連企業、などがいます。

どの段階で、どんな方が関わる／関わるべきでしょうか。また、関わる立場によって、意見が合わないこともあるかもしれません。どのように合意していくのがよいでしょうか。色々なテーマで、議論してみてください。

<議論のテーマ例>

・これまで治療が難しかった病気が治せるようになるだろうという科学者／社会の期待がある中、その期待が過剰になると、「デマ」「ニセ科学」「トンデモ医療」が広まってしまう可能性もあります。「病気を治したい」思う患者さんも多くいる中、こうした「ニセ」の情報に、一般市民としてどう向き合っていくべきでしょうか？

・基礎研究から臨床試験（第Ⅰ～Ⅲ相）を経て、患者さんの手元に届く過程の中で、どんな段階で、どんな立場の人が関わっているのでしょうか？基礎研究は、科学者だけが関わっているのでしょうか。患者さんや患者家族の期待やニーズは、どうしたら科学者に届けられるのでしょうか。

● 進路指導として

本ツールを読むと、科学は、いわゆる「理系」の人々によってのみ進められるものではないことがわかってと思います。そこで、「文系」の人々がどのように「理系」と連携するかを知ることで、（特に学生の方の）進路を考えるヒントとしてもお使いいただけるかと存じます。